

佐賀市老人クラブの現状と分析

佐賀大学文化・教育学部「上野景三教授」



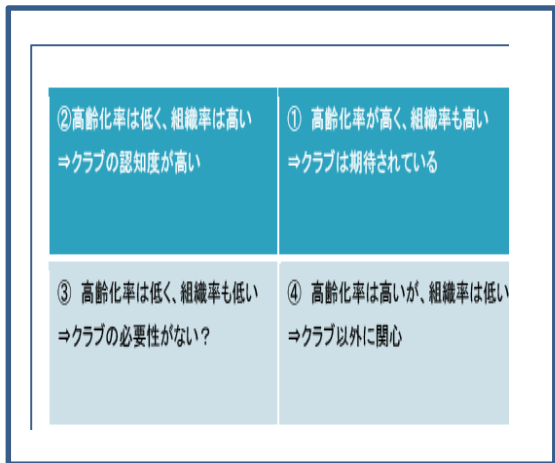
はじめに

佐賀市老人クラブ連合会では、今後の組織の在り方を考えるために、平成26年の10～12月にかけて全市の老人クラブの会員の方にアンケート調査を実施されました。なるべく多くの会員の意見を取り入れたいということで、会員の半数の7,285人の方を対象に実施されたものです。このアンケート結果から、会員の皆さんの意見を読み取ることができるのか、また組織の在り方についての期待や希望がどこにあるのかを、一緒に考えて見たいと思います。

●アンケートの分析に入る前に

まず、アンケート結果の分析に入る前に、現在の佐賀老人クラブの現状を

みてみましょう。各校区を高齢化率(25%以上)と組織率(25%以上)とを関連させて場合分けをしてみました。すると次の四つのパターンに整理されました。



右上の①の「高齢化率が高く、組織率も高い」校区は、老人クラブが期待されていることがわかります。多くの高齢者が住んでおり、高齢者問題が校区の中で喫緊の課題となっています。しかも多数の方が老人クラブに参加しているということは、老人クラブが高齢者問題の解決のために、なんらかの役割を果たしてきた、もしくは果たすことが期待されている校区です。

左上の②の「高齢化率は低く、組織率は高い」校区は、高齢者問題は、ま

た校区全体の課題とはなっていないものの、そこに住む高齢者の方は、老人クラブに入ることは当たり前のことだと認識されている校区です。つまり、校区の中で老人クラブ認知度が高く、一定の年齢がきたら、老人クラブに入ることは当然のことという共通認識が成り立っている校区です。

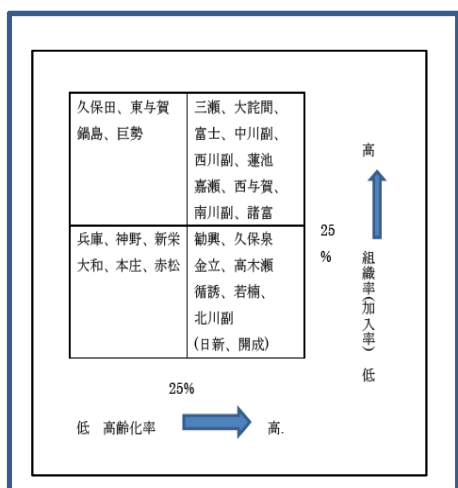
左下の③の「高齢化率は低く、組織率も低い」校区は、高齢者問題はまだ校区全体の問題とはなっておらず、おそらく校区全体として関心も低く、老人クラブの必要性もあまり感じられていないという校区です。したがって、高齢者の方々も老人クラブに入会する必然性をあまり感じておられないのではないかと推測される校区です。

右下の④の「高齢化率が高いが、組織率は低い」校区は、高齢者問題が喫緊の課題となっているものの、老人クラブには入っていない校区です。この校区では、現状の老人クラブに対する期待が高くないことが推測されま

す。

●校区別の特徴

では次に、今の分類で校区をみてみましょう。次の表をみて下さい。



校区別にみると、高齢化率と組織率の関係、また老人クラブに対する期待は、どうでしょうか。類型にあてはめてみると、どういう課題が見えてくるのでしょうか。

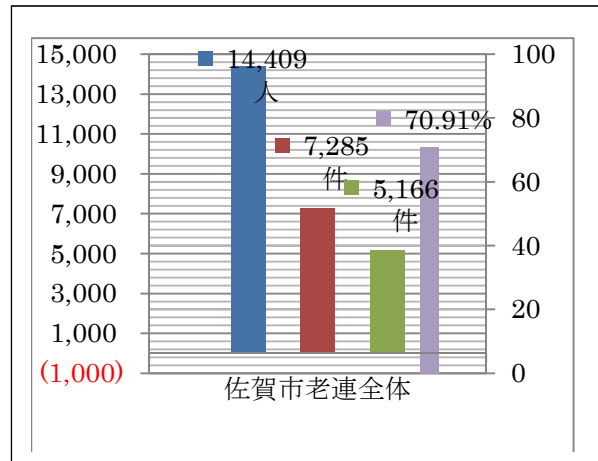
高齢化率の問題は、直接的に老人クラブの課題ではありません。社会全体の課題であり、行政課題といえます。誰もが直面する課題であり、みんな考えていかなければなりません。では組織率の問題は、組織・構成員の問題であり、どのように組織を維持していくことができるのかという課題です。社会的な課題と組織・構成員の課題

と課題をかけあわせてみたのは、社会的な課題に対して、組織が有効に機能しているのかどうかを考えてみたかったからです。老人クラブは、行政からは独立した独自の組織です。したがって行政の社会下請機関でもありません。独自の活動を組むことのできる自主的な団体です。でも、組織の課題を考えると、組織が社会的な課題、つまり高齢社会の問題にきちんと向き合っているのかどうか。つまり役に立つ組織であると会員はじめ、社会のみなさんから思われているがどうか。が大事だからです。会員のためだけの組織ではなく、社会のみなさんのための組織であってほしいと期待するからです。

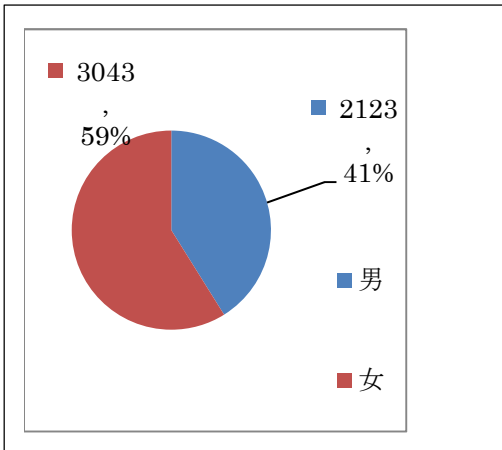
● アンケートの結果より

では、アンケートの分析に入ってみましょう。アンケートの結果から、いったい何がみえてくるのでしょうか。

アンケートは、会員の半分の方を対象にしました。実際の回答はそれよりも少なかったのですが、会員全体からすると、約1/3の会員の方の意見を聞くことができました。アンケートとしては大成功です。

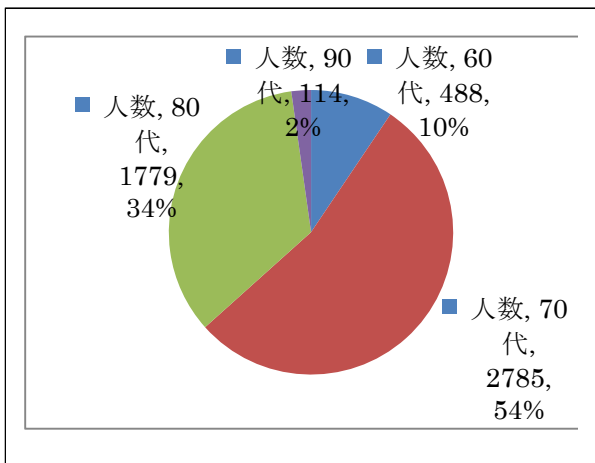


質問②の基本的属性をみると、老人クラブは、女性の会員が多い組織であることがわかります。



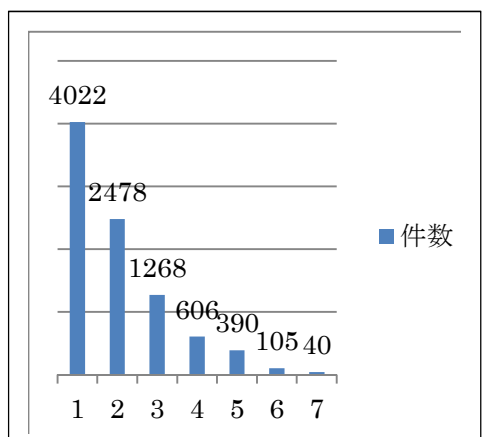
だからといって女性優位であるかどうかはわかりませんが、女性の声を反映した組織になっているのかどうかは課題の一つです。質問③の年齢別を

みると、70～80歳代の会員が多いことがわかります。この年代の声は反映しやすい組織であることがわかります。若手が入会しないという声がある一方で、60歳代の会員の声は反映しにくい組織となっています。平均寿命が伸びていますので、親子ともに老人クラブ会員という話も、あながち冗談ではないのです。すると、どうしても60歳代の意見はとりいれにくくなります。



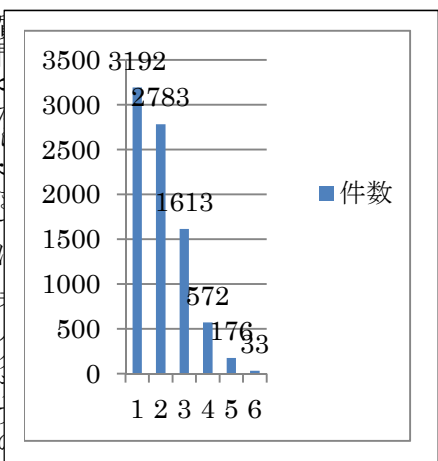
質問④の高齢者が果たすべき役割をみると、「自分の健康維持」が45.15%となっており、高齢者の責任としてまず自分に関心がむいていることがわ

かります。



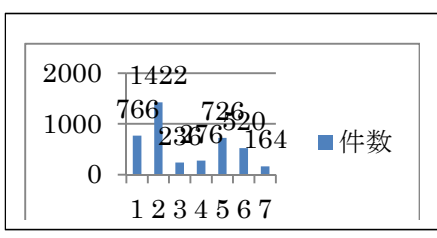
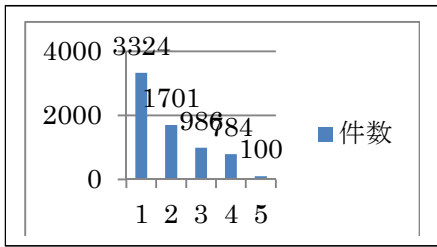
その次に回りの高齢者に関心がむいています。

質問⑤の身体が不自由になったときの回答をみると、行政や家族からの支援を求める声が多く、地域や老人クラブに支援を求める声は多くはないようです。

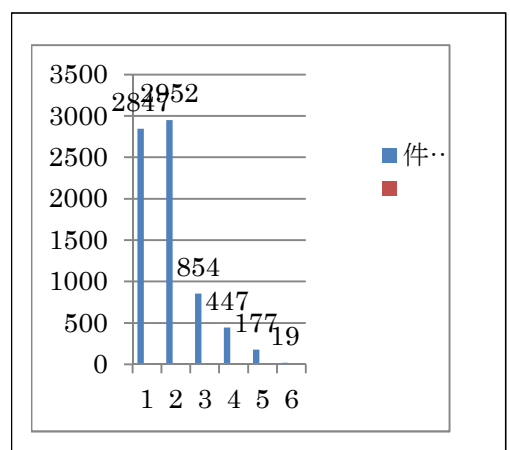


活動に対する認知度を聞いています。老人クラブの活動内容について知られているのは、まず地域奉仕活動です。次に児童の見守り活動、健康・仲間づくり活動、友愛活動の順となっています。質問の10~12は老人クラブに対するイメージとその理由です。老人クラブに対する良いイメージは、仲間づくりと交流、健康維持に役立つところとあります。悪いイメージは、人間関係の煩わしさ、老人という言葉、いろいろな負担感、ということです。

良いイメージ 良くないイメージ

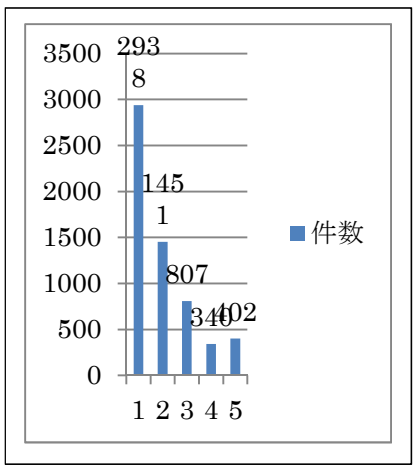


質問14は老人クラブの果たすべき役割についてですが、やはり自分自身の心身の健康維持・増進、仲間づくり、地域奉仕活動が挙げられています。



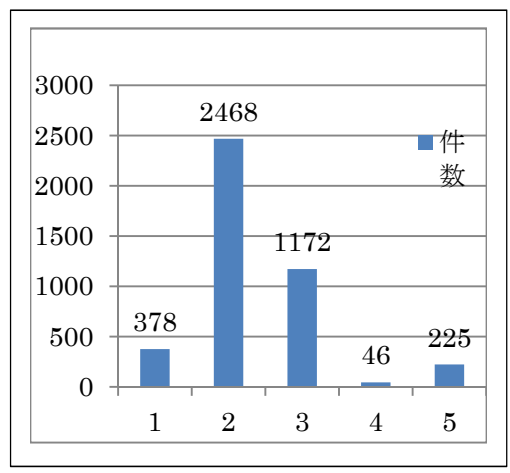
したがって質問15のやりたい活動も果たすべき役割と共通してきます。

質問16から18は老人クラブの運営の方法についてです。活動時間帯は平日の昼間に仲間づくりや健康維持活動、地域奉仕活動をやりたくて入会したとの声です。活動の情報も届いているとの声が多いようです。

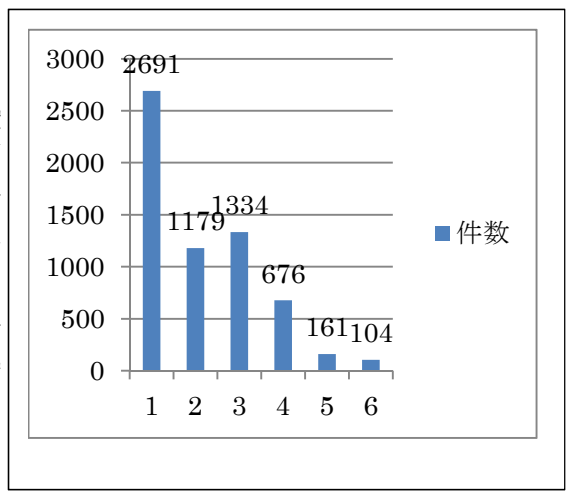


質問19は入会後の感想を聞いていますが、入会してよかったとの声が多

数なのですが、約1/4の会員は期待外れであったという声にも、耳を傾ける必要があるでしょう。



質問20以降は、老人クラブの問題点や課題について聞いているものです。どの組織でもそうですが、新規に入会する会員が少ない、役員の成り手がいない、もっと積極的なPRが必要、といった事項が挙げられています。その一方で、会員同士の助け合いや、趣味・軽スポーツ活動の促進、地域奉仕活動に積極的に取り組んでほしいとの声があがっています。



●自由記述にみる会員の意見

自由記述にもたくさんの方が寄せられています。皆さんの声を紹介したいところですが、ここでは大きな傾向についてのみご紹介します。だいたい意見をもとめてみると、①老人クラブの名称に関すること、②新規会員勧誘のための参加促進方法、③組織運営に対する意見、の三つです。

まず①の老人クラブの名称問題ですが、これは意見が分かれます。「老人」というイメージがよくない、抵抗がある、シニアやシルバーではどうか、という意見です。それに対して、そのままでもいい、「老人」という言葉に誇りをもとう、すでに親しまれているので問題はない、といった意見があります。この問題は、大きく二つの問題を

はらんでいます。一つは、なぜ老人クラブといふのかといえば、国の各種の調査では高齢人口というような定義がなされていて、老人福祉や老人介護といった「老人」という呼称が定着しており、全国組織も全国老人クラブと名乗っています。ですから、なかなか変えようがないという面があります。もう一つの問題は、実態として若い「老人」も存在しており、「老人」という言葉が入会の支障になっているとしたら変えるべきではないかという側面もあります。この問題は佐賀県だけではないかと感じるという問題ではありませんので、組織として継続して議論する必要があります。

②の参加促進方法については、輪を広げてほしい、楽しい活動を組み立ててほしい、

PRのやり方を考えてほしい、といった老人クラブの活動に対する声が挙げられています。この問題は、組織に対する期待の表れと考えるとよいでしょう。でも一方で役員の成り手がないという声もあります。そうであれば、役員研修の在り方や内容を工夫する必要がありますのではないかと思います。役員はどういう役割を果たしたらいのか、どうしたら楽しい活動を組み

ことができるのか、役員になることによつてどのような人生が充実したのか、といった経験交流や役員としての充実といった観点から研修を組むことはできないものでしょうか。

最後の③は、組織運営への意見ですが、まとめてみると、組織運営上の問題、活動内容の問題、だれがするのかといった担い手の問題、活動場所の問題、予算上の問題、といった具合に整理することができます。これら会員の意見をそのままにするのではなく、せっかくとつたアンケートですから、整理して一つひとつ対応策を考えてみたらどうでしょうか。

●今後に向けて考えるべき課題

最後に、組織の実態とアンケートの結果から、今後に向けて考えるべき課題について提示しておきましょう。

①一つは、私（高齢者）と高齢期の向き合い方についてです。平均寿命が伸びた、まだまだ自分は若い、働かなければならない、といった意見があります。かつてであれば、60歳を過ぎたら、誰もが「老人」とみなされ、老人クラブに入会するのは当然のことという時代があったかと思えます。しかし、実際には平均寿命が伸びている、

再任用されている、といった実態があります。つまり、高齢期といった考え方に幅ができています。このことは、一人ひとりの人間の中に高齢期に入ったという自覚と受容を生み出しにくくなっているのではないかと思います。高齢期に入れば、誰もがリタイアし、いろいろな関係性を失ってきます。だからこそ、高齢期に入るために心身ともに準備をしていかなければならない。その時に老人クラブは一定の役割を果たさなければならぬのではないかと思います。

②二つには、私（高齢者）と社会の接点・つながりをつくるということですね。前述したことと関係しますが、社会との接点を失いつつあること、つながりを作ろうとする意欲は表裏一体です。この点を踏まえて活動を組み立ててほしいものです。

③三つには、高齢者と高齢者の関係性づくりです。健康づくりや趣味の活動は、一人でするよりも仲間とやった方が楽しいに決まっています。ですが、仲間づくりへの関心は高いものの、その一方で抵抗感もあります。その抵抗感というハードルを低くさせ、活動に参加してもらい一歩を踏み出すこ

を組むことを考えてみたらどうでしょうか。

④四つには、高齢者と組織（老人クラブ）の関係です。誰しも、組織運営に最初から積極的にかかわっていかうとする人は少数です。経験のある方はいいのですが、みんなが全員そうではないえません。だとしたら、会員のみなさんの多くが、老人クラブという組織が必要だと感じることでできる運営方法を考える必要があります。どういう組織でも、負担はあります。ですが、少しの負担によつて大きな楽しみが生み出されるという組織にしていく必要があるでしょう。

⑤最後は、組織（老人クラブ）と社会との関係についてです。冒頭でも述べたように、老人クラブという組織は、今日の大きな社会問題である高齢者問題の解決にむけて影響力を発揮することのできる組織です。組織としての情報発信や情報収集、PR活動を行うということは、高齢者問題の解決にむけた取り組みでもあります。その点を会員全体で共有し、社会づくりへむけた提言を行ってほしいと期待します。